

蔵内数太教授記念号によせて

関西学院大学社会学部長

余 田 博 通

昭和34年夏のことであった。翌35年から文学部社会学科と社会事業学科とが母体となり社会学部を設置するというので、9月末日迄に文部省に設置申請を提出せねばならない事情にあった。われわれは、関西で最初の社会学部を設置するに当り、蔵内先生をそのリーダーとして是非お迎えしなければならぬと懇請していたのであるが、その決定的な御返事を得ることができたのであった。爾来7年をこえる年月の間、関西における最初の社会学部として如何にあるべきかを考えられ、社会学部の進むべき方向に関し常に指導的発言をされたのである。

関西学院大学の社会学部をわれわれが考えようとする時、その草創に立ち返って反省し、そこから多くをくみとらなければならないという意味であると思うのであるが、先生は、社会学部の前身たる社会学科を五十有余年前に発足させた、「学者たらんとする心・宗教家たらんとする心・政治家たらんとする心」の横溢していた、「吉野作造氏、内ヶ崎作三郎氏等と共に海老名弾正門下の三秀才といわれていた人」小山東助先生の諸業績を大切にすることの必要を説かれた。大道前社会学部長は、小山東助先生の著作集である「鼎浦全集」を求めようとして努力され、東京におられた河上丈太郎先生にその入手方を依頼された。河上先生は、大正7年に30才で来院され、昭和4年5月学院を去られる迄の十年間を学院の社会学科を完成するように努力されたのであった。故に先生も「鼎浦全集」の社会学部にとって不可欠のものであることを十分に知っておられて、河上末子夫人と共にその入手について努力して下さったのである。夫人はまづ神田中の古本屋をあさって下さったが、どうしても見当らなかった。そこで当時アメリカに留学中であった御令息雄氏に手紙で相談された所、令息より「ペリカン書房」という古本屋の主人に依頼するよりの返書であったので、夫人はその主人に面会された。ペリカン書房の主人は、そのような大切な書物ならば、私の古本屋の面子にかけてもさがすと意気込んでくれたのであるが、しかしその後神田本郷等の同業者のどこの店にもなかったと絶望の表情にて河上先生のお宅に現われた。しばし話がとぎれた時、ペリカン氏がふと次のことを思い起した。終戦直後のことであったが、故内ヶ崎作三郎氏（ベーツ院長に小山先生を始めて紹介した方）がペリカン氏をよび、自分は巢鴨で戦災に遇い家も蔵書も全部焼失したが、小山さんの本は真先に求めて、からっぽの本棚に備えたいと思うので、一つ骨折って呉れないかとの話があった。それがやっと神田の古本屋で手に入れることができて故内ヶ崎代議士を

大変喜ばせたということであった。そこで彼は早速内ヶ崎家に伺った所、果して「鼎浦全集」が保存してあり、それを譲ってもらって鬼の首でも取ったように河上先生のお宅にとどけたのである。河上夫人は早速それを一刻も早く夜分ではあったが宝塚の紅葉谷の大道先生のお宅に届けて社会学部に寄贈して下さったのである。夫人は「紅葉谷の夜空を仰ぎ見て大道先生に御約束を果たすと云ううれし涙がわれしらずにこぼれて来た事を思い出します」と言っておられる。社会学部にとって誠に感謝感激である。かくして、われわれは今や、社会学科創設者の精神を知り得る状態になった。蔵内先生のお言葉を守りたいと思っている。

さて、しかしながら蔵内先生は今年3月末をもって定年で御退職になった。誠に残念であるが規定によって致し方がない。今後も社会学部を見守っていただき、又御忠告もいただきたく考えている。

蔵内先生には、御在職中の幾多の御努力に対し深く感謝申し上げますと共に、今後も学部に対し御援助をお願いいたく存じます。ここに学部紀要記念号を献じ、学部一同の感謝の意を表したいと存じます。

終りに先生の御自愛を願い御健勝を祈ります。

昭和42年11月10日